日本行動計量学会会報
第46号
1989年1月31日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4—6—7
統計数理研究所内

計量化の価値をどこに見いだすか

吉村　功

行動の計量化の一つの特長は、客観化、つまり特別な立場や願望・偏見にとらわれない事柄の把握と表現であろう。実際、質問表の回答を数量化で一次元あるいは多次元の数値に表わすとき、それは確かに主観にまどわされない数量化になっている。しかしこれは、基本的には、集団現象の集団としての把握であって、これによって個別の、固有名詞を持った個人が客観的に把握されることにはならない。

なぜこんなことを言うかというと、私が今研究している、リスク評価や筆者認識においては、それについて迷いの生じることが多いからである。

リスク評価というのは、要するに危ないことの危なさを数量的に把握・表現することである。すなわちリスク評価では、起こり得る事象を列挙し、それが起こったときの損害の大きさを示し、その確率を推定することが主眼となる。そこで問題になることの一つは、損害の大きさを客観的に示せるかどうかである。

たとえば人の死を考えよう。その損害を数量化するには、普通、金額が用いられる。どれだけの補償金が相場であるか、どれだけのお金をかければ事故が防げるか、死ななかったらいくら稼げるか、などを推定するのである。社会として命を金に換算する限り、これらの方法はそれなりに合理的な数量化である。

ではこのような数量的評価は、関係する個々の人のすべてによって客観的・合理的と認められるものだろうか。

そうではないだろう。実際、死んだ当人にとって、このような数量化は何の意味も持たない。これを論外として、生きている関係者だけを見ても、個人による差、状況による差は大きい。当人を憎んでいた人は、よく死んでくれたと思うし、この人無しには生きられないという人にとっては、命は金に代えられないものだから、合理的な金額など考えられない。

それにもかかわらず、私はリスク評価でやはり損害の大きさを数量的に表現しようと試みる。その場合の私の立場は、明らかに、傍観者が社会全体の平均的な常識を数値に換算するという便宜的な作業者のそれである。それほど合理的であると思っているわけではない、にもかかわらずこれを行なう私の視点は、別のところにある。

人の命が金に代えられないといっていた時代には、人が殺されてもそれはほんの涙金で処理されていた。それが命を金に換算する習慣ができてから、どんどん命の値段が高くなってきた。今では日本でも一人の補償金が一億円に近くなっている。結果としてそれだけ人を殺すことのないように、という注意をするようになった。命を金に換算するという数量化は、ブラグマチックに命を大切にするという効果をもたらしたのである。

この場合の数量化は、客観化というより、裁判官あるいは世間一般に、命の価値を高める根拠と手段を提供したというところでなかろうか。

これは一つの例である。このようなことをただちに一般化しようというわけではない。しかし計量化・数量化が必ずしも、客観化とはいえないことや、それにもかかわらず全く別の側面でその意義があることがあるのは、認めていただけよう。応用面で計量化の価値・意義を考えるときは、事柄に即した見方をすることが必要だと思うのである。

よしむら・いさお
日本行動計量学会理事
名古屋大学工学部

第十六回大会報告

実行委員長　柏木　繁男

第十六回日本行動計量学会大会は、今年八月二十五日から二十七日の三日間にわたり、千葉大学文学部において開催されました。

今回の開催についての打診があったとき、私個人といたしましては、受けるべきか否かで多少の迷いもありました。しかし、幸いにも、千葉大学の関係各教室の全面的な支持と協力が受けられることとなり、開催をお受けすることとなった次第です。特に、心理学教室の宮埜助教授と学生諸君の労苦を惜しまない献身的な協力には、感謝して余りあるものがありました。

開催に当たってもっとも心配致しましたことは、天候のことでありました。通常の暑い夏のような場合には冷房が常識であります。しかし、国立の千葉大学は参会者の皆様に満足して頂けるだけの冷房設備を持って居りません。幸いといってはなんですが、今夏は異常気象で、その必要はそれほど切実ではなかったかに思われました。が、その反面で、熱帯性の低気圧による瞬間的な集中雨のため思うように参会者が集まらないのではという、強い不安がありました。しかし、これもそれほどのダメージともならず大変幸いでありました。

二つの特別講演『データ解析とは何か』（司会：竹内）と『政治意識の数量的分析』（司会：柏木）のそれぞれを韓太舜氏（専修大学）および京極純一氏（東京女子大）にお願いし、多数の熱心な参会者を集めました。また、シンポジウムは、『環境評価』（企画と司会：吉村）、『脳死と行動計量学』（企画：松村、司会：林）『フラクタル』（企画：田栗、司会：伊東）および『入学試験』（企画と司会：柳井）の四つが開催されました。今日的話題のせいもあり、部外者からの反響もあったようです。

個人の研究発表は五十四件で、医学データの処理、人工知能と計算機応用、多変量解析（1）、社会調査、教育行動、多変量解析（2）、尺度構成、行動計量モデルおよび数量化質的データの解析の九種類に分かれて活発に行なわれました。

総会は八月二十六日の第二日に行なわれ、通常業務関連報告と同時に、学会優秀賞と功績賞のそれぞれが次の方々に対して与えられました。前者は、大津展之、麻生英樹、栗田多喜夫（いずれも電総研所属）の御三方の共同研究に対して、また、後者は、水野欽司氏（統数研）に対してでした。

同日夕刻から懇親会が千葉大学生協食堂で行なわれました。そこで、『林先生に感謝する会』から先生の長年にわたる貢献と御苦労に対して感謝状をお贈り致しました。参加人数は四十六名でした。

実行委員会

特別講演会やシンポジウムの企画立案には、次の実行委員の方々の御協力をえました。田栗正章（千葉大）、星守（千葉大）、中野正孝（千葉大）、柳井晴夫（大学入試センター）、宮埜寿夫（千葉大）、松原望（東大教養）および京極純一（東京女子大）です。ここに実行委員長の柏木繁男（千葉大）から改めて御礼申しあげます。

大会参加者

正会員一七〇名、学生九名および非会員十四名の計一九三名でした。

大会運営および広告収入

日本リサーチセンター、ユニバーサルシステムズエンジニアリング、共立出版、マーケチングセンター、日精研リサーチおよび東洋経済新報社から広告を頂きました。特に、田中豊（岡山大）および上笹恒（筑波大）の御二方には大変お世話になりました。ここにあつくお礼申しあげます。

〔大会予告〕

第十七回大会は

●平成元年八月三日（木）～八月五日（土）の三日間

●岡山、カルチャーホテルで開かれることになりました。

○第十六回大会総会
時・昭和六十三年八月二十六日
所・千葉大学文学部
〔開会の辞〕学会事務局（江川理事）
〔挨拶〕開催校（柏木文学部長）
〔議長選出〕浅井晃氏（東洋大学経済学部教授）を選出
〔報告および議事〕
1. 昭和六十二年度事業報告、同決算報告（野元理事長代理および担当理事より行われ、原案通り承認された。）
2. 会計監査報告（宮原、開原両監事を代表し、開原監事より行われ原案通り承認された。）
3. 昭和六十三年度事業計画、同予算案（野元理事長代理および担当理事より行われ原案通り承認された。）
〔学会賞授与〕功績賞が水野欽司氏に、優秀賞が電総研ソフトウェア部数理情報研究室（大津展之・麻生英樹・栗田多喜夫の三氏）に授与された。
〔実行委員長挨拶〕（柏木繁男実行委員長）
〔閉会の辞〕学会事務局（江川理事）

〔報告〕林知己夫先生に感謝する会

過日千葉大学で開催された第十六回大会の懇親会の席上をお借りして、「林知己夫先生に感謝する会」が盛大に行われました。

この会を営むに当たって、会員の皆様に基金を募りましたところ、下記のように大勢の方々からご寄付をいただきました。幹事一同深く感謝しております。

当日の会は、
①柏木繁男大会実行委員長挨拶
②上田尚一氏の音頭による乾杯
③感謝状贈呈（野元菊雄理事長代理）
④林先生への感謝と古稀のお祝いのスピーチ（京極純一・浅井晃両氏）
⑤林先生のご挨拶
の順に進行しました。その後、出席者がそれぞれ先生と歓談するなどなごやかなひとときでした。

なお、会の当日は基金の総額が未確定でしたので、後日、林先生とご相談の上、記念品として、フレンチホルンPAXMANを差し上げました（ただし、代金の一部として現金で）。

○収支報告
この会の収支結果は以下の通りでした。

収入の部	
別記会員からの寄付金	730,000円
預金利子	2,723円
合　計	732,723円
支出の部	
記念品代	700,000円
感謝状作成費（額縁代を含む）	25,000円
通信費その他	7,723円
合　計	732,723円
残　高	0円

○基金をお寄せいただいた方々
（五十音順。敬称略）
青山博次郎、浅井晃、浅井邦二、阿部裕、生澤雅夫、池田央、井上隆勝、井上通敏、岩崎学、岩坪秀一、上田尚一、上田徹、内田良男、海野道郎、梅岡義貴、江川清、大島正光、大隅昇、大津展之、大橋靖雄、岡太彬訓、丘本正、奥田和彦、奥野忠一、開原成允、柏木宣久、上笹恒、河口至商、北村秀子、木下冨雄、京極純一、楠岡英雄、久保武士、熊田禎宣、栗原隆、後藤昌司、小濱哲、駒澤勉、近藤暹、斎藤平蔵、佐藤義信、佐藤義治、芝祐順、志村健一、杉戸清樹、杉山明子、鈴木庄亮、鈴木達三、鈴木久子、鈴木裕久、高倉節子、高根芳雄、高橋和行、田栗正章、竹下良昭、立花厚子、田中豊、千野貞子、千野直仁、辻岡克彦、戸田正直、豊川裕之、直井優、長浜友治、中村隆、納谷嘉信、奈良繁雄、西田春彦、西村春夫、二宮玲子、野崎昭弘、野田一雄、野元菊雄、蓮尾裕、馬場康維、林文、原科幸彦、肥田野直、古川俊之、松村良之、丸山久美子、水野欽司、三隅二不二、三宅一郎、宮埜寿夫、宮原英夫、宮原守男、村上隆、村上征勝、柳井晴夫、柳原良造、山崎秀夫、山本俊一、吉村功、吉村正昭、米田正人、若狭喜作、脇本和昌（以上、九八名）
（財）集団力学研究所、㈱電通リサーチ（以上、二機関）

昭和62年度　会　計　決　算

昭和62年4月1日～63年3月31日

収　入	決　算	予　算	増　減
前年度繰越金	△ 606,126円	△ 606,126円	0円
学術定期刊行物補助金	710,000	710,000	0
62年度学会費	5,203,100	6,062,500	△ 859,400
（正会員 816名）	（4,084,100）	（4,750,000）	（△ 665,900）
（準会員 45名）	（159,000）	（262,500）	（△ 103,500）
（賛助会員 32口）	（960,000）	（1,050,000）	（△ 90,000）
他年度学会費	4,336,000	1,750,000	2,586,000
学会誌売上金	309,550	840,000	△ 530,450
預金利子	2,061	10,000	△ 7,939
学会賞基金からの副賞	150,000	150,000	0
計	10,104,585	8,916,374	1,188,211

支　出	決　算	予　算	増　減
学会誌製作費	4,175,650円	5,478,600円	△1,302,950円
（和文誌 14巻2号）	（855,800）	（950,000）	（△ 94,200）
（〃 15巻1号）	（915,000）	（950,000）	（△ 35,000）
（〃 15巻2号）	（0）	（950,000）	（△ 950,000）
（欧文誌 No.22）	（982,850）	（1,314,300）	（△ 331,450）
（〃 No.23）	（1,422,000）	（1,314,300）	（107,700）
月例会費用	95,000	120,000	△ 25,000
各種委員会活動	288,410	300,000	△ 11,590
学会事務委託費	1,269,670	1,380,000	△ 110,330
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（0）
（発送手数料）	（1,053,370）	（1,150,000）	（△ 96,630）
（新入会員・異動処理）	（83,000）	（100,000）	（△ 17,000）
（その他）	（13,300）	（10,000）	（3,300）
人件費	15,000	15,000	0
印刷費	171,469	180,000	△ 8,531
通信費	953,390	1,000,000	△ 46,610
消耗品費	880	1,000	△ 120
会合費	40,930	80,000	△ 39,070
雑費	1,450	10,000	△ 8,550
予備費	0	1,774	△ 1,774
選挙費用	254,420	200,000	54,420
学会賞副賞	150,000	150,000	0
次年度繰越金	2,688,316		2,688,316
計	10,104,585	8,916,374	1,188,211

昭和63年度　予　算

収　入	63年度予算	62年度実績	備　考
前年度繰越金	2,688,316円	△ 606,126円	（注1）功績賞及び優秀賞
63年度学会費	6,340,000	5,203,100	
（正会員 6,000円×850名）	（5,100,000）	（4,084,100）	
（準会員 4,000円× 70名）	（280,000）	（159,000）	
（賛助会員 30,000円× 32口）	（960,000）	（960,000）	
他年度学会費	500,000	4,336,000	
学会誌売上金	300,000	309,550	
預金利子	10,000	2,061	
学会賞基金からの副賞（注1）	150,000	150,000	
計	9,988,316		

支　出	63年度予算	62年度実績	備　考
学会誌製作費	5,605,000円	4,175,650円	（注2）62年度未発行分
（和文誌 15巻2号（注2））	（1,076,400）	（和文誌14巻2号 855,800）	
（〃 16巻1号）	（950,000）	（和文誌15巻1号 915,000）	（注3）編集委員会，運営委
（〃 16巻2号）	（950,000）	（欧文誌№22 982,850）	会，刊行物委員会，学会賞
（欧文誌 №24）	（1,314,300）	（和文誌№23 1,422,000）	選考委員会，学術会議
（〃 №25）	（1,314,300）		
月例会費用	120,000	95,000	（注4）㈱日本学会事務セン
各種委員会活動費（注3）	300,000	288,410	ターへの委託費
学会事務依託費（注4）	1,380,000	1,269,670	
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（注5）1,200名 年8回発
（発送手数料）	（1,150,000（注5））	（1,053,370）	
（新入会員・異動処理費）	（100,000（注6））	（83,000）	（注6） 新入会員 70
（その他）	（10,000（注7））	（13,300）	異動 250
人件費	30,000	15,000	
印刷費	180,000	171,469	（注7）事務連絡費，コピー
通信費（注8）	1,000,000	953,390	代，リスト打出し料等
消耗品費	1,000	880	
会合費	80,000	40,930	（注8）学会事務センターに
雑費	10,000	1,450	おける郵税を含む
予備費	1,132,316	0	
選挙費用	0	254,420	
学会賞副賞	150,000	150,000	
計	9,988,316		

会議記録

○理事会
時・昭和六十三年八月二日
所・統計数理研究所
出席者・理事九名
1. 担当理事より昭和六十二年度決算報告案および昭和六十三年度予算案が提出され、それぞれ承認された。
2. 第十六回大会での総会次第について意見を交換した。
3. 学会賞受賞者を決定した。
4. 肥田野理事長が八月十九日～九月三日まで海外出張のため、この間の代理を野元理事に委ねることとした。
5. 第十七回大会の開催校について意見交換がなされ、岡山大学に依頼することとした。
6. 各種委員会報告、事務局報告が行われた。なお、運営委員に杉山明子氏（東京女子大）を追加して委嘱する旨の提案があり承認された。

○理事会
時・昭和六十三年八月二十五日
所・千葉大学文学部
出席者・理事一〇名
1. 第十六回大会の総会次第を決定した。
2. 各種委員会報告が行われた。なお、保留となっていた刊行物委員委嘱案が提案され、原案通り承認された（下段参照）。
3. 第十七回大会を岡山大学で開催することが決定した。
4. 第四期学会賞選考委員会の委員長を決定した。
5. 本学会宛に送付された教官公募記事掲載依頼状の扱いについて論議した。今後、学会として適当と認めたものについては会報に掲載することとした。

○理事会
時・昭和六十三年十一月二十八日
所・統計数理研究所
出席者・理事十一名、他一名
1. 第十六回大会についての報告が柏木繁男氏（千葉大学。第十六回大会実行委員長）より行われた。
2. 第十七回大会の開催時期について意見を交換した。（その後決定した期日はp.2を参照。）
3. 各種委員会報告が行われた。
4. その他、林知己夫先生に感謝する会、学術会議・行動科学研究連絡委員からの報告等が行われた。

刊行物委員会メンバー決定

保留となっていた刊行物委員の委嘱は、上掲の理事会で承認され次の五名が委員となりました。
（委員長）林知己夫（放送大）、（委員）古川俊之（東大・医）、松原望（東大・教養）、安本美典（産業能率大）、柳井晴夫（大学入試センター）

○運営委員会
時・昭和六十三年八月二十六日
所・千葉大学文学部
出席者・運営委員九名
1. 今後の運営委の活動全般について、種々意見を交換した。
2. 中でも、最近は諸学会の研究者がパソコン通信ネットワークを利用し、情報交流を活発に行っている状況があり、本学会としても今後の課題になるという声があるため、次回の会合では、JUNETに詳しい市川伸一委員に現状と問題点を説明してもらうことにした。
3. 新運営委員会が委員の追加として理事会に申請していた、杉山明子委員（東京女子大）が、八月二日の理事会で正式に承認された。杉山委員は、会報編集担当の杉戸委員を補佐する。

○運営委員会
時・昭和六十三年十月十九日
所・統計数理研究所
出席者・運営委員八名
1. JUNETについて、市川伸一委員の解説を中心に、今後の利用法をめぐって検討した。
2. 岩坪秀一理事から要望のあった〝MULTI・WAY〟データ解析法に関する討論集会として、第48回月例シンポジウムを開催することにした。担当は、柳原良造、石塚智一の両運営委員。午前から夕刻までの長時間とする。なお、初めての試みとして、市川委員がJUNETを通じ広く非会員に向けて、今回のシンポジウムの情報を伝えることとした。

会員数（89・1・13現在）	
名誉会員	一名
正会員	一、〇二八名
準会員	七二名
賛助会員	二九社

★昨秋に発行するはずの本号がこのように遅くなりましたこと、心からおわび申上げます。

御礼

林　知己夫

会と記念品の御礼を申上げます。

行動計量学の重要性を認識し、私の研究方向を変えることが出来たのは、学会あってこそのことと私の方から感謝申上げたい気持ちです。十二年を超えて理事長として勤めさせていただきましたが、微力のため、大きなことも出来ず申訳けなく思っております。

それにもかかわらず、醵金していただき、何か記念品をということなので、有難くお受けし、PAXMAN・40M（ゴールド・プラス）というフレンチ・ホルンをいただくことにいたしました。

これは、私にとっては（あるいは誰にとってもかも知れません）最高に良いホルンです。いままでは、この旧型を常用しており、十分満足していたのですが、さらに響きのよい新型が一昨年出来たのを知り、入手したいと思っておりました。おかげさまで、手にすることが出来ました。

腕は拙いのですが、主観的にはよく鳴っているなと思われる折々を楽しみに吹いています。愛用しております。有難う存じました。

●関連学会のうごき

○ヒトとコンピュータに関する第3回国際会議（3rd International Conference on Human-Computer Interaction）

時・一九八九年九月十八日から二十二日まで

所・米国、ボストン

日本国内連絡先

〒214川崎市多摩区長尾6—21

産業医学総合研究所　斉藤　進

電話〇四四－八六五－六一一一

○第22回国際応用心理学会議

時・一九九〇年七月二十二日から二十七日まで

所・京都市・国立京都国際会館

事前日程

八九年五月　第2号サーキュラ発行。個人発表・ワークショップの申込み、十一月まで。

発表領域　組織心理学、心理学的評価法、心理学と国の発展、環境心理学、交通心理学、教育・学校心理学、健康心理学、経済心理学など14の領域。

参加費用　六万円

問合せ先

〒565大阪府吹田市山田丘1の2

大阪大学人間科学部産業行動学研究室（06八七七－五一一一）

昭和62年度　学会賞基金決算報告

昭和62.4.1.～63.3.31.

収　入	決　算	予　算	増　減
前年度繰越金	1,210,230円	1,210,230円	0円
林知己夫氏よりの寄付金	100,000	100,000	0
預金利子	21,989	10,000	11,989
計	1,332,219	1,320,230	11,989

支　出	決　算	予　算	増　減
学会賞副賞	150,000円	150,000円	0円
次年度への繰越金	1,182,219	1,170,230	11,989
計	1,332,219	1,320,230	11,989

●国際雑誌創刊の情報

一九八八年から、R・J・バージイド教授（イリノイ）とD・Rフィールド教授（オレゴン）を編集委員長とする環境社会学の国際的な研究誌"Society and Natural Resources: An International Journal"が創刊され、論文投稿を求めている。

本誌の内容や投稿規定についての詳しい情報は、編集委員である満田久義氏（当会会員。仏教大学社会学部。〒603京都市北区紫野北花の坊町96）までお問合せを。

▼会報係から

右のような関連学会のいろいろな情報をお寄せ下さい。できるだけ掲載します。お待ちします。

第3回学会賞受賞者の声

功績賞受賞にあたって

水野欽司（みずの・きんじ）

これまで考えてもみなかった突然の受賞で、大変困惑しております。何度か辞退しようと思ったのですが、結局は有り難く頂戴することになりました。

振り返ってみますと、好奇心旺盛で、おっちょこちょいの私ですので、これまで手広く多くの研究課題に首を突っ込んできましたが、やはりその多くは、社会調査、それも人間の意識・態度を内容にする調査研究であったと思います。しかも調査法の理論研究よりは、具体的な調査の実際面で、どうすれば良質のデータを入手できるかという難問に強く関与せざるを得ないものが大半でした。

ご存知のように、この種の努力は、泥臭い仕事ばかり。華麗なる理論・解析法の研究とは大きくかけ離れています。労多く忍耐強くなければ続けられません。特に最近は、社会調査の危機と言われるような、社会環境が生まれ、非協力や低回収率によるデータの劣化が眼に余ります。

元来、天の邪鬼でもある私は、皆が敬遠しがちな泥仕事を、自分の体調を維持できる限り、続けていきたいと思っています。泥臭くても、私にとっては貴重な珠玉に他ならないからです。

今回の受賞に関し、本学会会員の皆さんに深く感謝申し上げる次第です。

優秀賞受賞にあたって

大津展之（おおつ・のぶゆき）
麻生英樹（あそう・ひでき）
栗田多喜夫（くりた・たきお）

この度、本学会から優秀賞を頂き、大変光栄に思っております。通産省工業技術院電子技術総合研究所という、一見、行動計量学とは無縁な所で工学の立場から情報処理を研究している私達の研究が、このような学際的な学会において何がしかの貢献を認められて、嬉しく思っております。

多変量データ解析手法は、おもに曖昧で多面的な対象を扱う人文科学、社会科学、さらには医学の分野において、データの持つ情報を効率よく要約し、研究者の的確な評価や直感的総合的な判断に有用な形へまとめる強力な手法として発達してきたわけですが、工学の分野では、これまで手法としてあまり定着していないようです。本来、工学が精密科学（理学）の実践であった以上、受け入れられる余地が少なかったからでしょう。

しかし、情報工学の出現以来、「情報」という接点を介して隣合った近い関係ができました。パターン認識や人工知能の研究がそれです。これらは、情報工学の分野でも特に認識や思考といった人間の情報処理機能をモデル化してその工学的実現を目指すものですが、方法論的には大きく分極化していて、人工知能の研究においては厳格な論理と記号操作が支配的です。一方、パターン認識の研究は、データ解析と非常に近い関係にあり、ながら、それほど多変量解析手法との関係は意識されていません。理論的には、統計的決定理論の応用としてのベイズ識別理論が中心で、特徴抽出はそれぞれ個別的に考えられているのが現状です。

今回受賞の対象となりました一連の研究は、現在行っている研究プロジェクト「柔らかな論理方式」の一環としての多変量解析諸手法の統一的基礎づけに関するものです。このプロジェクトは、これまで行ってきた特徴抽出を含むパターン認識過程の理論的研究において明らかにされた、非線形判別とベイズ決定との密接な関係をもとに、背後の統一的な確率的構造を基盤として、これまでバラバラであった多変量解析（データ解析）、パターン認識、さらには人工知能（知識表現と推論）の方式を結び付け統合化する試みです。

多変量解析や数量化手法を単に人間の判断のための補助的な手法としてではなく、積極的な形に組み込んで広く工学的な応用を図ること、いわば『現象を知る』立場から『「現象を知る」機能をモデル化して応用する』立場への展開は、認知科学とも一体となって、本学会の新たな発展の一方向として重要であるように思われます。

以上、工学の立場から行動計量学との関わりについて、とりとめなく感じるままに書きましたが、この受賞を励みとして、なお一層の努力を重ねていく所存です。

最後に、本紙面をお借りして、本学会を通し御指導また刺激を頂く多くの方々に感謝いたします。